

帰郷

まえおき

二十世紀後半、我々日本人の多くが自由という言葉にあこがれた。誰もかれもが、自由な世界を求め、自由であれば幸せになれる。そして自分の人生に納得して死を迎えられる、そう信じて疑わなかった。

が、少し冷静になって考えてみると、果たしてそうか。自由は常にスペードのエースなのか疑念も起きる。

すべての人間がこの世に生を受けたとき、そこには両親がいて、兄弟や祖父母も一緒に暮らすことになるかもしれない。しかも、自分の意志に関係なく生を受ける当の子供にとって、誰を両親に選ぶか。いつどこで生をうけるか、といったとても重要な問題に関与出来ない。とすると、人間は誕生の瞬間から束縛され、本来、自由な存在でないということになる。

この単純明快な事実を前にしても、二十世紀の日本人は完全な自由を探し求め、そこにだけ幸せな人生があると信じてきたように思う。しかし、この世に生を受けた人生の始まりから必然的に束縛されることは他に幾らでもある。その際たるものが遺伝的制約である。

人の姿は多様である。背の高い人がいる一方で、本人の意志に反し、人並み以下の人も少なくない。それに皮膚の色も艶も、顔の形も、百人いれば百人の顔がある。すべてが美人や美男子とは限らない。

それに性格や意欲・能力の違いもある。人との接触を極端に嫌う人。そうかと思えば、誰彼の区別なく陽気に付き合ひ、羨ましいほど開放的な人もいる。

小学校や中学時代、ある子供は好きなだけ遊んでいても優秀な成績を取り、先生にも親にも喜ばれる。その反面、コツコツ毎日勉強しながら決して成績の上がない子供だって沢山いるだろう。その違いは確かに大きい。

これらはすべて、人間が誕生から背負わされる制約、また束縛であり、多くの人々が願う人生の理想的な平等や自由という面では大きな障害になる。

だがそれでも、多くの人々は自分の自由を捨て切れない。努力してでもその壁を突破し、自分の望むべき人生を歩みたい。まさにそのとき、人々は自分だけの決断をし、周囲に流される人生を自分の手元に引き寄せようとしている。

少し昔に出た歌謡曲の中に、小椋佳が作詞作曲した「遙かな轍」という有名な歌謡曲がある。主に中高年のサラリーマンがカラオケで歌ったといわれるこの歌は、すべての人間における人生の本質、あるいは横顔をテーマにしているが、その言わんとするところは、人生を他のなにかになぞらえるなら、片道切符で乗った汽車の旅だ、ということに相違ない。

人の人生はまさに、この歌に集約される、と私も思う。一步一步あるく先に明確な道標などなく、さらにその先にしても、我々人間の人生における終着駅など、最初からでも途中でも見えてこない。

だが、それでは困る。なにに頼って決断すればいいのか、見当もつかない。また決断を適時にしなければ、すべての人の人生は否応なく流される。清流に浮かぶ泡沫のように、あるいは急流に翻弄される笹船のように、……。様々な年齢で起こる決断のとき。人はどこかに眠る先輩や先達の話が聞きたい。それも作り話でなく、生々しい体験や経験の中身について知りたいと思う。しかし、どこにいる誰の話が本当に信用出来るのか。しかもその人の体験談は鮮明で、奥行きが広く、多様で重要な話なのかどうか。

情報化時代といわれる二一世紀の現在でも、この点を確かめる術は見当たらない。信用できそうで、なお疑問や不安が浮かんでくる。すべて本当の話なのか。自画自賛の聞き辛い話を聞かされるだけではないのか。自分には関係のない話ばかりではないか。一旦そう疑い出すと、どれもこれもアクセスに値しないように思える。

それを承知で、古希の時代を迎えた私はここに、異常とも奇妙奇天烈とも親しい友人からいわれる自分の拘った人生について、体験談と経験談を書き残す。それらがいつか、どこかで誰かの決断に役立てば幸いである。

ある決断の後で、自分は無知だった、知らなかったと悔やむ前に、この本を読んで戴ければ幸いである。

どの道を選んでも、人生に悔いは残るかもしれない。それでも果敢に決断して欲しい。なにもしないで苦しむより、積極的ななにかの決断を繰り返しながら、各々の人生を送って欲しい。それが六人の子供を育て、多くの大学生を教えてきた私の願いである。

第一部 私の歩んだ人生（三十歳まで）

おことわり

学者・研究者の一端を担ってきた現役時代、私は一般的な大衆雑誌も小説もまったく読まなかった。しかし、アラスカオオカミの研究直後に患った心臓病のせいで、野生動物研究の第一線に立てなくなった五十代後半から、手当たり次第の読書に奔った。それはつまり、乱読そのもので、一種の中毒だったかもしれない。

推理小説、恋愛小説、それから時代小説にも手を伸ばした。そんな中で、ふと気になる内容の本に出会うと、間違いなく著者の年齢と経歴を調べる習慣が身に付いた。

もし一冊の本の中に注目し、後々まで記憶に残そうと思ったとき、著者のはつきりした素性がどうしても知りたかった。それを知らない限り、本に書かれた内容を鵜呑みにしていたら後で後悔すると思った。

そうして調べると、素性を完全に伏せた著者がいる。女流作家の場合は年齢を伏せている場合が多く、男性では学歴はおろか、幾ばくかの人生遍歴の跡さえ隠している者がいる。

あまり深く考えた訳でもないが、気が付くと私はそうした著者が人間として信用できず、一旦金を出して買った本であっても、その多くをゴミ箱に捨てる習慣を身に着けた。

ドキュメンタリーを意図して書くこの本の冒頭に、誕生から三十歳に至る人生について、簡単な自己紹介をしておきたい。これは、私という人間の後半生を制約しつづけた大きな要素の一つでもあり、遺伝と共に、各々独自の人生を送る際に、重要な側面になる、と考えたからである。もしそれは不必要だ、肝心の中身だけが重要だと思われるなら、この第一部を飛ばして次の話に進んで戴きたい。

（一）悪ガキ時代

昭和十六年、真珠湾攻撃の日から遡ること四カ月、お盆の最中に私はこの世に生を受けた。

明治二四年生れの父は当時、ある大企業の抱える水力発電所の特殊技術者で所長。生みの母は大正時代に小樽の高等女学校を出て、結婚前は戦前の小学校で女教師をしていた。

昭和二十年八月、悲惨な戦争は終戦のときを迎えた。その四カ月後の師走、生みの母が法定伝染病で死亡。焼き場に向かう母が馬櫓に乗せられ、雪の中

に消えていった。その情景を幼い私は姉の胸に抱かれながら、声もなく見送っていた記憶がある。

昭和二二年の春、父は戦後初の地方選挙で地元ニセコ（旧狩太村）の村長になり、翌年の春、私の小学校入学と合わせるように、五十代半ばの父は再婚に踏み切った。私の継母となるその女性は最初の結婚に敗れる前、自分が産み育てた唯一の息子を戦争で失っていた。その息子は山本五十六海軍大将与一緒に飛行機で、南太平洋に沈んでいた。

小学校の三年まで、私は年上の仲間と日々、悪ガキとなつて遊び呆けた。夏休みにつづく二期の開始に当たり、ふと軽そうな鞆を開けた。そこには鉛筆一本と汚いノートが一冊。それに教科書らしきものが三冊あった。

不足した分の補充を親に頼むつもりはなかった。そうすれば多分、まず怒られるだけだろうし、元々学校は勉強するところでもなかった。

民主主義の下、新たに始まった地方自治体組織（村役場）の中に金銭を国が指定した方で出し入れ出来る人間はただ一人。戦前、北海道庁から派遣された役人の一人（収入役）で、監視能力のない周囲を疎かにしながら村の金の一部を穀物相場資金として使い込んだ。そのことは後日発覚し、議会での大問題に発展していった。

夜、村役場から戻る父親に暗い影が漂った。まだ幼い小学生の私にも、漠然と父の苦悩が伝わってきた。

帰宅後、なんの意味も目的もなく真田紐を単調に織りつづける父の姿。その姿を終始沈黙を守り、表情も一切変えぬまま何も口にしない継母。自宅のすぐ前にある村議会の議事堂や役場の内部でつづく昼間の喧噪と関係なく、我家の中は静寂だった。ただ、そこには無理をして押し殺された暗い緊張感も秘かに漂っていた。

翌年、父は一期四年の終了を待たずに、問題の責任を一手に引き受け、村長の職を離れた。それと同時に、私達の住いは村の中心にある立派な村長住宅から場末の小さな借家に移ることになった。

それから間もなく、私の心境も大いに変わった。悪ガキ精神が影を潜め、孤独に想い耽る小学生になっていた。頻繁に他人の家を訪ね、顔見知りだった大人の人や、年寄に話を聞く時間もどんどん増えていった。

村長の辞職から三年後の三月末、父が元技術者だった王子製紙関連の子会社で新たな役職を用意されたのに合わせて、我家はニセコから苦小牧という市に移ることになった。

そのニセコを去る当日、古びた駅構内は大雪に覆われていたが、笑顔一つない私達家族を、多くの人々が見送ってくれた。その中に、小学校の先生方に交じって、同級生全員の姿もあった。

悲しい別れだった。SL時代の寂しさを隠し切れない別れでもあった。

(二) ある朝の新聞記事

昭和二九年、子会社の全権を握る責任者として、父の姿に活気が戻った。それと同時に、中学に入学した私も明るさを取り戻し、部活で野球部を選んだ。

広い校庭で元氣一杯久々に走り回る日々は楽しかった。新しい土地で友達も出来たし、父が若い時代に付き合っていた人々も近くにいた。

中学で最初の夏休み、担任教師の家庭訪問があった。そのとき、私は部活で家にいなかったが、その晩、継母から一言囁かれた。

「あなたね。中学一年のIQテスト結果に比べて、今の成績は低過ぎるようですよ。もう少し勉強すれば、成績は間違いなくトップクラスになる、と担任の先生は言っていましたよ。」

継母の性格か、本人の心構えかどうか、その点はどうにも分からない。ただ、中学生の息子に対する母の言葉は極端に丁寧だった。それはともかく、そんな母の言葉に騙された。

—じゃ、勉強でもしてみるか。—

元々、遊んでいても数学の成績は何故か良かった。また、好きでもあった。夏休みの終わる前から、自宅での勉強を始めた。最初は好きな数学ばかりだったが、一年生から二年生に進む頃には、英語の教科書の中身のすべてを諳んじることが出来た。

成績がどんどん上がる、中学二年の秋に朝刊の片隅で、ある記事を見つけた。社会面だったと思う。そこにこんな話が書かれていた。

—憲法が明治憲法から新憲法に変わった最初の司法試験で、受験者は新憲法でも旧憲法でも受験出来た。—

その記事を自分の眼で見付けたとき、一瞬頭の中を電流が走り、息が詰まった。嘘だろう、という言葉が口先から飛び出した。

憲法が変われば、刑法も当然変わる。死刑が無罪となり、非国民という罪人が健全な良識のある国民の一人と変わってしまう。

それを裁判所で裁く人間、またこれが犯罪だと追及するのが検事。しかもその両者になる資格を国家として審査するのが司法試験だ。

終戦を挟んで我が国は生まれ変わった。だとしたら、この司法試験ばかりでなく、戦前の裁判官はみんな首にされるべきだろう。それは戦前から戦中にかけて、頭や尻を叩きながら多くの子供達を戦場に送り出しながら、新しい憲法下で引きつづき教師している人間にも言える。

さらに視点を変えれば、戦前から戦後に時代が変わる中で人々に訓話を垂れる寺の坊主にも、教会の牧師にも言える話だと私は思ったのだ。

中学生という年齢に相応しい日々はまた、私から遠く去って行った。替わりに欺瞞だらけの大人社会に対して激しい憤りを覚える一方で、自分もやがてそんな世界や社会に否応なく呑み込まれるかもしれない、という恐怖感に囚われた。

この問題に抜け道はなかった。だからやがて一つの結論が頭に浮かんだ。

—死ねばいい。死がすべての疑問・難問を帳消しにしてくれる。—

中学三年、自分なりの解決策を見出した。その思いを抱えつづけていた高校二年の六月、私は自分の身体に太いロープを巻き付け、大き目の石をそれに繋いだ。それから湖畔に捨てられているボートを無断借用。最後に底深いことで知られる支笏湖の中央部分で湖中に身を投じた。

それ以降、記憶は途切れ、自分の身に何がどう起こったのか、覚えていない。ただ、ある日のある時、見知らぬ古い旅籠のような建物の階下から父親の声が聞こえる。それが今、こうして古希を生きる私の再出発の時だった。

(三) 性成熟の恐怖

大人社会の实情に拒絶反応を起こした中学時代後半、子供だった私の内部で、もう一つ無視出来ない問題が起こっていた。

昭和三十年前後、日本中の一般家庭に白黒テレビは勿論、電機釜も洗濯機もなかった。だから、家族中の洗濯が私の家では母親の専業となり、子供が自分の衣類を洗濯するようなことなど、一切なかった。

ある日、布団の中で目覚めた私は自分のパンツに違和感を覚えた、調べてみると、パンツの一部がベトついたまま嫌らしく濡れているのだ。

決してそれは年甲斐のない寝小便の跡ではない。かといって、天井からの雨漏りの跡とも思えない。では何が原因でこうなったのか。考えたところで、当時の私に納得出来る答えなど、見出す可能性もまったくない。

困った、とまず思った。そのパンツを新しいものに変えたかったが、それは昨夜、風呂の後に母親から渡されたものだった。だから、自分専用の整理ダンスを持たない私にとって、安易な解決策が見当たらない。

仕方なく、その汚いパンツを履いたまま、学校に出掛けた。しかしその途中はもとより、午前から午後の授業時間中、私はその不快な現実を奪われつづけた。

自宅に戻り、自分の部屋に入って考えた。その頃にはパンツの中もカラカ

ラに乾いていた。乾いていたが、それで問題が解決した訳では決してなかった。

ため息をつきながら、落ち着いて前後の状況やでき事を考え直した。昨夜は何故か特別疲れたまま眠り込んだことをまず思い出した。それから夜中のどこかで、ぼんやり夢を見たような気もした。しかし、その記憶は全体的にあいまいで、考えをまとめる材料に成り得なかった。

明治半ば生まれの両親は家の中で冗談も無駄口もたたかなかつた。食事中、子供がおしゃべりをしてはいけない、と躰の厳しい母親は常にいつづけていた。後日気付かされたことだが、継母は私を武士の末裔の男子として育てることを考えていた。

中学三年、十五歳の誕生日に床の間のある客間に私を座らせ、常に着物を手放さかった継母が、私に向かってはつきりこう言った。

「貴方は今日、子供から大人の一人になりました。今まで、口煩く貴方に小言をいいつづけた母を許してください。でも今日、この時をもつて、二度と小言はいいません。後は貴方が自分の力で成長していくのです。しかも貴方という人は十分、自立していく力を備えています。私はそれを楽しみに、この先の人生をいきいきします。」

私はその言葉に驚いた。しかしここまで厳しく息子と向き合ってきた母かと思うと、目の前の相手が恐ろしくもあった。

確かに、その日を境として、継母は自分の言葉を厳格に守りつづけた。それはまた、自分の手で育てた息子に対する、無言の躰の仕方だったのだろう、と思ったのは私自身が子供の親になった三十歳の頃だった。

いずれにして、ある日ある時から始まり、繰り返しパンツ内部で起こるこの異常事態に私の心が揺れつづける。

まず、それまでになかった不愉快な気分が一日中、私を捉えて離さない。それに、汚れたパンツを毎回継母に洗ってもらう憂鬱。事前になんの説明も弁解も口に来ないもどかしさ。

やがて、継母との日常的な会話から完全に身を避ける自分がこの世に姿を現した。毎日学校から戻った私は自室に閉じ籠った。勉強をしていた訳では勿論ない。ひたすら考え、ひたすら戸惑い、そしてひたすら悩んでいた。

特に悪いことなどしていない。遊んでいるのもふざけている訳でもない。なのに、私のパンツは毎週のように汚れてしまう。その事実も、それを継母に手渡すことも、苦痛に似た不快感を巻き起こす。

ふと気付くと、中学校の授業中に私の眼は可愛い女の子の姿を追い掛けている。挨拶こそ交わさないが、学校の行き帰りにも私の眼はすれ違う女の子

の方に惹かれるような気もする。

―これは私ではない。―

そう思って新たな自分の姿をごまかそうとする一方で、

―しかし、これもまたもう一つの自分なのだ。―

という声が聞こえる。外からか、あるいは自分の内部からなのか、分からない。

頭は混乱し、心が乱れる。それに、下腹部から性器の辺りで異常な緊張感も常に漂う。自己否定と自己嫌悪に悩む日々、

―これが大人になる入り口なのか。そんなのは嫌だ。大人になんかなりたくない。自分の意志と努力を受けつけない、こんな世界など許せない。―

中学三年の終わり頃、私はそんな思いを抱えながら生きていた。

(五) 転 校

新聞記事の一片から始まった現実社会への反発。それと同時に起こった男としての必然的な性成熟現象に対する自己嫌悪。高校二年六月の自殺未遂。

当時、本人は本当に生きるのが辛かった。それは末息子を目の前にする両親にとつても、重苦しい日々だったに違いない。だが、自分に厳しい継母はなにも言わない。

自殺から復活していた息子を支笏湖畔の旅籠まで迎えに来た時、

―さあ、帰ろうか。―

父は一言そう言った。

それから一カ月後、学校へも行かず、自宅でもまったく口を開かない息子の部屋に、老いの見える父の姿があった。大きなバナナが一房、その両手に抱えられている。

「私が生きている限り、二度と自殺などしないで欲しい。頼んだよ。」

ゆつくりと穏やかに、父が言った。そして寂しそうに、身体の力がすつかり抜けてしまったていた父は、再び継母の元に戻って行った。

そのわずかな一言が私を縛った。

―もう、勝手は許されない。―

自殺から四カ月後、高校二年の十月から私は再び普通の高校生に戻っていた。少なくとも、学校の同級生や担任教師、それに両親の前でも、私は自分の内面に動揺する姿を見せないように努力していた。

ごく自然に読書癖は元に戻った。勉強も再開した。他の遊びもしなかったから、学業成績は一気に上がった。その上、無口でおとなしい同級生の女の

子とも付き合った。一見、それはごく普通の高校生の姿だったに違いない。その年の十一月、父から中高時代を過ごしてきた苫小牧を去る、と伝えられた。

―都合で阿寒湖近くの足寄という町

に私は母さんと移る。ただしお前は、進学のことがあるから、釧路の進学校に進みなさい。あそこにはお前の兄がいるから心配ない。―

父からの突然の言葉にも、私には動揺がなかった。何処にいても、どんな高校でも、関心はなかった。ただ、そこでふと一つの考えが浮かんできた。

―よし、それなら最後の期末試験で一番になろう。―

そこに特別な理由も意味もなかった。ただ、それを密やかに付き合っていた彼女と、二年間一緒だった級友への置き土産にしようと思っていた。

思い通り、あるいは期待通り、結果は本当に付いてきた。三月末に苫小牧を離れ、遙か東方の釧路へ移った。

(六) 進路の選択

同じ北海道でも東端の一角を占める釧路の街は別世界だった。北太平洋の荒波が目前に迫り、市街全体に鳴り響く霧笛の始まる六月からは、深くて冷たい霧がすべての景色を掻き消す世界だった。

高校の行き返り、頭に石川啄木の歌が浮かんだ。それに、映画にもなつて有名になった原田康子の小説「挽歌」の世界を彷彿される風景も、至る所で見ることが出来た。

新しい学校でクラスの中に女の子は一人もいなかった。でも、男子だけの高校生活も、思いの外快適だった。

適当に受験勉強の真似事はつづけた。そんな中で、自分の進路を決める問題が私の頭を捉えて放さない。

両親には常に完全な自由を与えられていたから、すぐ就職するという道もあった。ごくいつとき、寿司職人ということも念頭に浮かんだ。しかし、それは一時の迷いに過ぎなかったようだ。

勉強の合間で受験雑誌を広げていたとき、一つの情報が目に飛び込ん出来た。

―日本でただ一人、法哲学の教授が京都大学にいる。―

それは天から私に下された啓示に思えた。胸が切なくなり、雑誌を持つ両手が震えたのを今以って鮮明に覚えている。

―これに決めた!―

もう迷う必要はなかった。進路は唯一つ、京都大学の法学部。後は受験の合格に必要な学力を自分の努力で備えること。

高校時代三年間を通じて、初めて私は爽快な日々を迎えた。だがやはり、そんな幸運も長くはつづかなかった。

その年の十一月末、二日連でつづいた全国的な大学受験の模擬試験があった。受験科目は当時の国立大学の全学部共通するものだったから、現役中の自分にはとても疲労感の残る試験だった。

週末二日間の模試を終えた翌週の朝一番に、教室に姿を現した担任教師がみんなの前で私の名前を呼び、一寸職員室まで来い、という。

理由はまったく分からない。普段から口数の多い級友達も、不可解な顔で担任と私を眺めている。まただからといって、担任の言葉に反発する気持ちも湧いてこない。

担任教師の背中を追って階段を降りる。そこに職員室があつて、担任の席まで入り込む。

少し緊張気味の担任が重たそうに口を開く。

―鈴木君、君のお父さんが昨夜遅く、足寄の住いで死んだそうだ。このまま学校を早退し、急いで自宅に戻りなさい。―

冗談は顔だけにして欲しい。何故、今こんなときに、……？

学校から戻る途中で、私は苦い笑いを隠せなかった。何故なら、丁度その朝、登校途中のポストに私は生まれて初めて父に書いた葉書を投函していたのだ。

内容の簡単なその葉書の中で私は一つの言葉を優しかった父に書いていた。

―これまで沢山苦勞を掛けていたけれど、どうやら今、自分には揺るぎそうにない進路が見えている。それは京都大学の法学部への進学。だからどうか、安心してください。―

その葉書を一連の葬式の間、私は現地の住いの片隅で見つけ、秘かに釧路を持ち帰った。

葬式の間中、姉五人と兄二人は泣いては愚痴り、愚痴っては泣き言を繰り返していた。しかし、一番下の私に涙はなかった。悲しいとは一切思わず、ただひたすら、わずか三日の患いで死んだという父に、独りポツンと言葉を掛けた。

―お父さん、苦しむ時間が短くて良かったね。―

高校三年だった私の心の中にあつたのは、それがすべてだった。ただ、その葬式を境に、頭の中は空洞の一途を辿った。受験勉強は勿論、一人で考えることはすべて、虚しい空白の中に漂いつづける。

年末を間近に控え、京都大学も法哲学も、遙か貴男に消え去った。親の支援が長くつづかない限り、そこから先、道らしい道は見えてこない。しかし、それではどうするか。

父は急死した跡に、私が大学四年間に使うであろう資金だけ残していた。

それを前に、余り悩む時間もなく、一番近い北大の文学部に進み、そこで人間性の探求に励むことで、私は自分の心と折り合いをつけようと決心した。後から考えると、それは大きな妥協の産物。時間に追われながら当惑に沈む自分をとにかく騙す口実に過ぎなかった。そして、その妥協の産物から始まった一人の男にとって、人並みの幸せな生活とか、家族との穏やかな生活の日々という時間は、生まれようもなかったようだ。

(八) 学生結婚

昭和三五年、私にとって激動の連つづいた高校時代から北大での学生生活へと状況は変わった。だがそこは、過去の経緯故に特別な感激も感動もない、前半の人生では比較的平坦な時間の始まりのように思えた。

西暦でいうなら、昭和三五年は一九六〇年に当たる。それはつまり、学生用語でいうなら、六十年安保闘争が最大のクライマックスを迎えた年。東大生の樺美知子(東大生、共産党員)が学生と機動隊の衝突という状況の下で最初の犠牲者になった年でもある。

大学に入学直後、樺さんの死を契機に、大学全体も私が生活を始めた学生寮でも、終日終夜、膨大なエネルギーの緊張が走った。激しいアジ演説、街頭デモ。疲れ果てた身体で部屋に戻った後の終わりなき議論の数々。それらはすべて、前半の私の人生に大きな影響を与えた。

しかし、気が付くと私はやはり、憤りや異常な興奮に満ちた学生デモ集団の外に身を置いていた。

―身近な学生仲間が口にする意見も議論も分かりやすい。しかし、話は余りにも大き過ぎる。―

明治維新を生きた時代の若者、つまり西郷隆盛や坂本竜馬達も多分、国中至る所でこんな議論をしていたのだろう。しかし事実上、自分の命を代償にして歴史を変えてしまった維新時代の若者に比べて、目の前あるいは自分の周囲に集う学生達には、既存の国家権力打倒に必要とされるであろう信念など、どうやら無縁に見える。だとしたら、やはり……。

私は私なりに、自分のありようを決めなければならぬ。高校時代の終わりに漠然と考えていた「人間性の探求」という言葉に、具体的な形を与えなければならぬ。

高校時代から初歩的な歴史書や宗教書を読んだ。それに、哲学書や世界文学全書も読み漁っていた。しかしそれら一つ、一つ別の学問だとしても、私の問題意識に対する回答を準備しているような学問とは思えなかった。

敗戦直後の日本に、それまでになかった新しい学問が入ってきた。その中に、戦勝国アメリカから移入された実験心理学という学問があった。

私が大学に入った当時、実験心理学に「心の科学」という注釈が付いていた。数少ない天才の思索によらず、ある程度の知識や能力のある者なら、誰もが手に出来る実験で人間の基本的な性格や性質を解明しようという新たな分野だ。

戦後早々、日本が戦争で敗れた原因のすべては、精神論に偏り過ぎたからだと言われていた。また逆に、その戦争で勝者の主役だったアメリカの勝因は科学もしくは科学技術の発達を重視し、その成果を次々と生かしながら戦争をつづけたからだ、という見方も多くの日本人に受け入れられていた。

結局、私は大学二年で実験心理学の道を選び、それを単なる勉強の対象に留まらず、研究の対象として終生つづけようと考え始めていた。

大学三年の秋早く、学生寮を出て近くの下宿に移っていた私の部屋に一人の女性が頻繁にやってきた。

私と同年齢の彼女は高校時代の同級生。ただし、特別な関心も興味も持ちえなかった相手である。

当時、すべての遊びを捨てて研究室と下宿の間を毎日往復していた私にとって、特別な女性を必要としたり、あるいは特別な関係に進みたいという願望はまったくなかった。だから当初、私は彼女の下宿訪問に戸惑いを覚えていた。

やがて、何度目かの訪問の際、彼女は思い掛けないことを口にした。

「結婚してくれませんか。いえ、私は貴方の傍にずっと寄り添っていたいのです。私にその資格がなくて結婚が駄目なら、妾でも女中でも構いません。どうか考えてください。」

直観的に言えば、

「この女性は今の自分と棲む世界がまったく違う人だ。――

と最初に思った。何故なら、

「僕には生きるか死ぬか、それ自体が問題なんだ。だからその話、僕には無縁のことだと思うけど、……。」

と答えるしか、私には言葉もなかった。すると、彼女はさらに口を開いた。「知っている。私とクラスが一緒だった高校時代、貴方は支笏湖に飛び込んで自殺したでしょ。あれは担任が秘かになかった事件として握り潰そうとしていたけれど、同級生はみんな知っていたの。だから私、あのときから貴方という人に惹かれ、なんとかこの人の支えになれば、と思ってきたの。」

一寸待った。それと僕自身は直接関係ないでしょう。――

私の本音はその言葉に尽きる。嘘も偽りもない。しかも、下宿を毎度一方的に訪れてくる彼女に、私はまだ指一本触れていない。義理もなければ、責任もない筈だ。

でも、色白の丸顔にのぞく彼女の大きな目は、まさに真剣そのもの。こと

らの安易な返答を否応なく押し潰す。

「しばらく考えさせてもらう。」

仕方なく、その場しのぎを承知で、私はそういいながら相手の言葉をやり過ぐす。

それから、彼女の下宿襲撃は後を絶たない。仕方なく、下宿での読書時間の合間に私は考えた。そして最後に出した結婚の条件は次のようなものになった。

いつまで生きているか保障出来ない。でもそれでいいなら、一つだけ条件がある。

僕は一生、人間性の探求という難しい課題を考え、このまま大学院から研究者への道を歩む。ただそうすると、結婚後の君は学者の奥さんということになるが、周囲の先生方の奥さんを見ると、みんな相当の家柄に生れ、四年生の大学も出ている。そこで高校卒業と同時に田舎に引き籠った君も四年生の大学に改めて入り直した方がいい。それが君自身のためでもあり、僕の研究生活に支障をきたさないための前提条件になるだろう。分かってもらえるな、。。。。。

私の勝手かどうか分からない結婚条件を聞くと、狭い下宿の中で彼女の顔付が一気に変わった。大きな二つの眼が輝き、飛び上がらんとする内面の衝動も、全身から湧き上がっているように見える。それから一瞬、息を溜めた後、彼女は答えた。

「分かりました、有難う。私自身は貴方の言葉に従い、大学に挑戦します。ただそうになると、母に相談しなければなりません。少し時間を下さい。」

かっつの同級生に聞くと、彼女の母親はとてつもなく偉大な人だった。

明治時代の北海道の片田舎で生まれた彼女の母親に、当然とはいえ、尋常小学校以上の学歴はなかった。なのに、彼女が私に求婚の希望を伝えていた当時、その母親は公立小学校で北海道で初めての女性校長という、輝かしい地位まで登り詰めていた。

私が大学院の一年目、そして彼女は札幌市内にある女子大の二年目になった春五月、私達はどうにかささやかな結婚式の日を北大の構内で迎えた。そこには両家の親類縁者の数以上に、身近な多くの大学教官と、親しい研究室仲間の顔が揃った。

その結婚式直前、五十代でまだ生き生きとした目を輝かせるその母親が、私の耳にささやいた言葉が古希を迎えた今、鮮明な形で記憶に蘇る。

「甘ったれで幼い子供のままの娘ですが、よろしくお願いします。貴方達の家は今、札幌市内に建設中ですが、後一月で完成します。どうか心置きなく二人だけでお使いください。それと失礼でなければ、貴方が大学院生の間、

二人の学費と生活費の一部は私が送ります。あの娘のことですから負担かもしれませんが、本当にどうかお願いします。」

(九) 義母の急死

昭和三十九年春、北大文学部の大学院に進み、心理学研究者の出発点に立つ。それと同時に、高校時代の同級生(百合子)と結婚。札幌市内南部のリンゴ園の片隅に出来た新築の住宅で新婚生活を始める。

毎朝、百合子が先に家を出る。少し遅れて、私も自分の大学に向かう。二人共、向かう方向は同じ。同じバスと電車を乗り継ぎ、札幌駅の北に所在する二つの大学へ向かう。百合子はカソリック系の女子大。私は北海道の開拓開始当時からつく国立大学。

私の専攻は動物実験心理学。文科系ながら、物理学同様に、厳密な科学の一つとして人間の本質に迫る新興の研究分野である。

そのせい、ゼミや授業で使う教科書は実験物理学関連のものが多く、正しい科学認識の方法論とか、統計分析学、さらには農学関係の実験計画法など、記号と数式ばかりの勉強が延々とつづく。しかし、幾ら人間性の研究に自然科学の方法論を採用するといっても、これでは頭が痛くてたまらない。

それに加えて、人間を研究するといいながら、実験で相手にするのはネズミとモルモット。

期待と希望に満ちた大学院生活の始まり。それが半年後に疑問と不安の日々に変わり、学生結婚の甘さを急激に奪い去る。

すべては私に原因があるが、つまるところ、豊かな会話と楽しい会話などのあるべき新婚の家庭生活が、重々しい沈黙の日々に変わる。すぐ脇で一緒に暮らす相手に、心を使うべき最低限の責務すら果たせない。

明けて一月二十日、冬休みが終わった百合子が自分の大学の構内から凍死寸前の仔犬を自宅に持ち帰る。本人こそ口にしなかったが、そこには新妻なりの心使いがあったのだろう。

真冬一月の真つ暗な夕べ、北国の厳しい寒さが全身を覆うその日、自宅に戻った私の前に、小さくて真黒な仔犬が眠っている。余りの意外さに、一瞬言葉を失う。

でもやはり、仔犬は可愛い。理由はない。否、理由などそこで必要ない。しばらく忘れていた微笑みが、自然に湧き上がる。

「これどうしたの？」

一応、妻に聞いてみるが、その返答に耳を傾ける気持ちもなければ、聞いてどうする、という話でもない。

私達夫婦に新婚生活の雰囲気に戻り始める。研究生活における行き詰まりも、そうなると余り問題にはならない。

短い一刻の安らぎかもしれない。それでも、前途に暗雲が広がる私にとって、掛け替えのない時間がその日、その夜から始まっていた。

丁度それから一年後、私は大学院で修士論文をまとめ、大学に提出した。また同時に、私達夫婦の学生生活を支えてくれた妻の母親に、ハガキを一枚書き送った。

—これで一段落。—

そう思う日々が始まった直後、義母が校長牡る小学校の教頭と名乗る人物から、一本の電話が入った。

「もしもし、こちらは〇〇小学校の教頭ですが、今朝登校してみると、学校の脇にある校長住宅の玄関内で先生が倒れているを見つけました。急ぎ手配をして、先生を苦小牧の市立総合病院に送り出したところです。出来るだけ早く、苦小牧の病院にお出で下さい。よろしくお願い致します。」

「……？」

相手が電話を切つても、受話器を元に戻すことすら頭に浮かばない。

「どうしたの、何があつたの、……？」

百合子に聞かれても、返す言葉が浮かばない。沈黙したまま、時間が流れる。心の片隅で、嘘だろう、という自分の言葉が聞こえる。

それでも結局、電話の内容から強引に妻を遠ざけることも出来ない。

「お母さんが今朝、校長住宅で倒れていたそうさ。苦小牧の市立病院に搬送中だそうだが、すぐ病院まで出掛けるように、というのが教頭の話だ。どうする、すぐ出掛けられるかい？」

「えっ、嘘でしょ。でも勿論、それが本当なら貴方と一緒に出掛けるわ。いいでしょ。」

原因や理由はどうあれ、その義母が突然倒れたというのだから、現地にすぐ飛ぶことは当然だった。

結婚して一年半、私達に最初の子供が生まれていた。娘だった。長い人生で母子二人だけの心許ない生活を送ってきた義母がその孫娘を見て、満面の笑みを浮かべて喜んでくれた。その義母が玄関の三和土の上で頭を打つていたらしい。入院の直後も、その一週間後も義母の意識は戻らない。

入院後十日目、その義母に一瞬、うつすらと意識が戻った。

「母さん、私誰だか分かる？」

乳飲み子を抱えながら、妻が呼び掛けた。しかし、何一つ返事らしい返事

はなかった。次に、妻は赤ん坊をもっと近付けながら、少しトーンを落として話し掛けた。

「お母さん、この子分かる？」

すると、義母の様子が変わった。

「○○ちゃんでしょ。」

その言葉に、弱々しい微笑も加わった。

義母はそれ以上、回復の兆しもなく、緊急入院後二週間でこの世を去った。一カ月後の三月半ば、葬式後の後始末を終えた私達は、ようやく札幌市内の自宅に戻った。その時、私達は決して一生忘れることのない、印象的な場に遭遇した。

極寒の時期は過ぎても、自宅は多くの雪に覆われていた。その点は玄関のドア前も変わらない。が、その雪の上に何故か円形の窪みが見える。ふと頭を巡らし、それらしき答えに行き渡る。

「モク、おーいモク。しばらく待たせたね、帰ってきたよ。出て来なさい、……。」

そんな私の呼び掛けに妻も従う。

一月以上前、突然の事故で慌てた私達は、愛犬のモクを家の外に置き捨てた。だから、あの利口でも甘ったれの仔犬が、それまで生きているかどうか分からなかった。

時間は掛かった。都合よくすぐにとはいかなかった。でも、やがてモクは私達の前に現れた。少し怯えながら、短い尾を股の間に忍ばせながら。

ところが、そのモクより先に、大きな犬が自分の古い箒を連想させる尾を豪快に振りながら、私と妻に飛び掛かって来た。

「ジョン太！」

妻が大声で叫んでいた。

「ジョン太、お前が気の弱いモクを支えてくれたの。そうでしょ、……。」

ジョン太は師走にどこからか現れた牡の野良犬。気が向けばふてぶてしい態度で我家の内部に押し入り、夕方少し暗くなる頃、また強引に外へ出掛ける。動きはいつもゆっくりしているが、体格面で現れる余りの大きさと、異様ともいえる目の鋭さは唯物でない。普通の人なら、近付かれるだけで悲鳴を上げるような、本当にたくましい野良犬の親分だった。

家の中に入る直前、玄関の扉に一枚の紙が貼ってある。そこには次のような警告文が書いてあった。

警告

お宅にいる大型犬が郵便配達員を寄せ付けません。この状況が続く限り配

達業務を中止します。早急に対応を検討し、当方までその結果をお報せください。その確認が終わるまで配達業務は再開しません。

昭和〇〇年二月 豊平郵便局

(十) 幼い娘の死

私の妻となった百合子にとって、母親の急死は深刻という言葉さえ虚しい出来事に違いなかった。だが、札幌の新居に戻り、生れて間もない次女と愛犬のモクと野良犬ジョン太の囲まれ、百合子はどうか生きる気力を完全に失うことにならなかった。ただ、深夜の睡眠中、私の横に眠る百合子は毎晩、毎晩叫びつづける。

「母さん、助けてー。」

という叫びに加えて、

「母さん、どうしたの。今、どこにいるの？」

というはつきりした言葉も、彼女の口から飛び出してくる。これが普段のことなら、

「いい加減にしないか。目を覚ませ、……………」

と怒鳴って止めることも出来るが、相手のおかれた状況を考えれば、それもこれも仕方ない。

私の大学院生活の前半、修士課程といわれる二年間はそうして終わった。

やがて、大学院の三年目、博士課程に入った私の日々は急激に変わった。

科学一般の研究に必要な基本的知識はすでにある。完璧とまではいわれないが、それに関連する専門書を傍に抱えていれば、医学や生理学や生物学の専門的な知識も理解するのに困らない。

ただやはり、本命の実験心理学でネズミやモルモット相手の実験も研究も、私の意欲をそそらない。

気が付くと、家の中ではモクという飼い犬に、外に出れば、ジョン太や彼を取り巻く他の野良犬達の姿に心が向かう。

大学の研究室にいるネズミやモルモットも、一寸開放してやれば走り回る。食べること、寝ることもやはりやる。だが、そこには動物の生命感こそあれ、自分で自発的に生きようとする姿は欠けている。欠かしているのは私達人間側の勝手だが、魂の欠片も失った彼等から、人間の本性を探る研究など到底出来るとは考えられないのだ。

私の亡き父も、息子の自由な生き方を許してくれた。その点では、北大の文学部で、独創的な研究に勤しみ、余り有能といえない私のような学生に研究の場を与えてくれる先生達も、決して自分の考えを押しつけるようなこと

がなかった。またそこに、大学院生として生きる私の理想的環境が転がっていた。

義母の急死から四カ月後、二人目の娘が生まれた。家族がそれによって人間四人と犬二匹となり、はつきりとした明るさの広がる、楽しい家庭生活に変わっていった。ただ、それが突然のことに、破滅の日を迎えていた。

昭和四三年、長女が二歳半で次女が一歳に近付いた五月の末、家の中で事故が起こった。

揃って夕食を終えた後、手洗い場と風呂のある場所から妻の声が聞こえてくる。

「パパ、私先にお風呂に入るから、〇〇ちゃんの服を脱がせてこつちによこして。」

そのとき、居間で気になる新聞記事を見ていた私は、何も考えず、自然に手先だけが動いてしまった。

服を脱がされると、娘は走って居間から風呂場に向かった。しかし、すでに服を脱いでいた妻は風呂場の中にいなくて、その手前の廊下に置かれた洗濯機の中に、家族の汚した衣類を投げ込んでいる最中だった。

家の中でドボンという意味不明の大音響が聞こえた。つづいて、

「パパ、助けてー、・・・・・・・・。」

という妻の悲鳴が聞こえる。

友人の医者に即刻電話で状況を伝え、的確な指示を仰ぐ。その答えは、

「〇〇病院に私も飛び込む。多分、今電話をしておいたから、院長が玄関で待っているは筈だ。すぐ行く。慌てるな、車の運転に注意しろ。」

ということだ。

手術室兼用の集中治療室の中で、幼い命は丁度丸一日生きていた。が、それがすべての限界だった。

人間社会の片隅で起こった事件とその後の成り行きを無視して、時間だけは休みなく、私達の前を通り過ぎてゆく。それは無常ということも、無残という言葉に繋がる。

娘のそんな事故死を境に、私達一家三人になってしまった家庭生活は再びどん底の日々を迎えることになる。

本人の通ったカソリック系の女子大の好意で娘を墓地に葬った後、家の中で自分の中に閉じ籠るようになった百合子は、私の姿を見ると、何度も何度も繰り返す。

「死にたい、死にたい。〇〇子のお婆ちゃんの所に私も行きたい。だって、あの子はお婆ちゃんが可愛いから、自分の世界に連れ出したのよ。そうですよ、・・・・・・・・。」

—そんなことはない。そんなことはあり得ない。—

私は内心そう思う。だからといって、

「お前は馬鹿だ。喚くな、騒ぐな。目の前の幼い子供が怯えているぞ。——
と言っても、状況は一向に変わらない。」

「シスターになってもいい？ 自分も死にたいから、パパ内緒で私を殺して。」

そう頼まれても、はいそうですか、という話にはならない。

振り返るとあれから三年間、笑いをすっかり捨てた妻が自宅から外にでることはまったくなかったのだと、少しボケ始めた私の記憶は語ってくれる。

(十一) 第二次オイルショック下の惨事

野良犬の追跡調査を始めて約十年、私の下北通いも四年目の夏を迎えた。

昭和五十年、私はようやく三十歳を目前にしていた。

時はくしくも、第二次オイルショックの最中。テレビは日用品の買い出しに奔る膨大な女性群の姿を繰り返し伝えている。

大学の長い夏休みが始まり、例によつて、自宅のある札幌から下北に向かう。交通手段はいつも通りの安っぽい乗用車。それでも出発して五時間後、津軽海峡を挟んだ向かい側にある下北半島が見える函館のフェリーターミナルに辿り着く。

いつも通りの簡単な乗船手続き、車検証を見ながらの乗船名簿記入。その時、場内アナウンスで何故か私の名前が呼ばれ、指定の場所へ赴く。

「私はスズキですが、なんでしょうか。」

「ああそうですか。今会社に釧路から電話があり、至急この電話番号に電話を下さい、ということですよ。」

「分かりました。」

受付の事務員から受け取った電話番号、それは釧路に二人いる義兄弟の内の弟の自宅電話番号。

「それにしても何故、こんな時に、……?」

不可解だが、なんの答えも思い浮かばない。それでもともかく、電話を掛ける。

「もしもし、こちら〇〇ですが、急にどうしました？」

すると、電話の向こうから、慌てふためいた声が聞こえる。

「ああ、こんなに早く貴方から電話をもらえてよかった、よかった。実はです……」

彼の話によると、今日の早朝、兄貴の自宅に電話を掛けると、何故か電話に誰も出ない。おかしいなあ、と思って昼前に兄貴の家の横に車を着けると、どうやら室内で一大事件が起こっているようだ。ところが自分は普段から臆

病で頭も悪いから、これから一体どうすればいいのか、さっぱり分からない。そこでふと、貴方の名前と電話番号を思い出し、貴方の札幌の奥さんから情報をもらって、そこに電話を掛けたという。

その話を聞いて、私も一瞬、言葉を失う。それに、釧路とここ函館では、余りにも話が遠過ぎる。だから、一呼吸して、私は言った。

「あのね、話の重大性はどうにか分かるけれども、貴男の近くにおいて信頼出来る高校時の友人じゃダメなの？」
すると即座に、

「それは駄目。もしこの現場に彼等を連れてきたら、全部が全部逃げ出すよ。これは僕の直観だが、ここで一番安全で役立ってくれるのは貴方しかない。頼みます。拝みます。今ここでまずどうすればいいか、教えてください。その通り僕は動きます。」

という返事が返ってくる。そこで仕方なく、

「ではまず、そのまま近くの電話を探し、一一〇番に電話する。それからお兄さんの自宅の前の表通りで、警察官の到着を待ってください。後の話はどう一度私に連絡下さい。このままここで待機していますから、……。」
と言って電話を切る。

次の電話を待つ間、私はようやく気付いて受話器を持ち直す。

「ああ、仙台さん。こちらはススキですが、洋八爺さんはそこにいますか？」

「あれ、スズキ先生。貴方一体どこにいるの。もう大間に来てるの。こっちは大変なのよ。先生、どうか助けてください。お願いします。」

おいおい、それはないでしょう。一度に二か所から緊急の救助依頼をされたところで、同時に話はこなせない。

「それで一体、何が起こっているの？」

「あのね、先生。昨日の夜から疲れた、疲れたといっていた家の爺さんが、今朝になったらもう布団の中で死んでいるのよ。」

「……。」

「どうした。先生聞こえているの？」

勿論、それは確かに聞こえている。ただし、そこですぐ、どう答えていいか分からない。

仙台の洋八爺さん。小柄でサルによく似た彼に営林署仲間がつけた綽名はモンキー。下北の山歩きも好きだが、偶然、山でサルの群れに出会うと、仕事その中で夢中になる。その点、山林監視員としてはどうやら問題の多い人物だが、サルの姿を求めて下北に通いだした三年前から、私の案内人としては他に探しようのない貴重な人物。

昼間は山で彼の知識と経験に支えられ、彼の自宅に戻る夜ともなれば、飯だ風呂だと今度はタキ婆さんの世話になる。それが私の下北生活。だとすれ

ば、ここは簡単に済まされない。

ただし、仙台の洋八爺さんはすでに死んでいる。だとすれば、今更なに私に出来るのか。

一方、話の真相こそよく分からないが、釧路からの緊急支援依頼には、まだ湯気さえ出始めたという状況が状況だからだから、親族や家族の死を繰り返して直直してきた人間の一人故に、今すぐになにか役立つことがあるだろう。

結局、電話の向こうから聞こえるタキ婆さんの切なる要請を断り、私はそこから札幌の自宅に戻った。それからすぐ、着替えを抱えて釧路に直行。その夜遅く、事件現場に辿り着く。

無数の人間が入りする現場の中から、間もなく私の手元にもある明快な姿が浮かんで来た。

テレビの前で小学一年生の息子が殺され、台所では義理の兄嫁が殺されている。そして玄関の内側では通報してきた男の兄が血に染まって倒れているのだ。

釧路という地方都市では前例のない大事件。釧路の警察本部が全力を挙げて犯人検挙に励み、その傍ら、数多くのマスコミ関係者も朝から夜遅くまで現場と、被害者の親戚友人関係に張り付く。

犯人不明のままの通夜と葬式。その間にも、遺族関係者の家には正体不明の人物が横行する。

他社に先駆ける特ダネの獲得。そのために、多くの記者とカメラマンも暗躍する。事件直後から一週間、犯人逮捕の話は聞こえてこない。

釧路の現地に滞在し始めた私の役目はマスコミの対応係。わずか五百円の香典で通夜に出席する人々。その中の大半が捜査官とマスコミ関係者。そして朝な夕な加えて、深夜遅くまで遺族の後を追いつづける記者さん達。

そんな形のない脅迫行為から、遺族関係者を守りつづけること。それが私に課せられた仕事。誰に依頼されてそうだったのか、今以って分からない。

深刻極まりない地方都市、釧路での出来事あるいは大事件。犯人の姿はまだまだ見えて来ない。

事件発生後一カ月、ようやく現地から解放されて札幌に車で戻る。その間、一人で車にいるせいとか、すべての話や出来事や真の現場体験が走馬燈のように頭を過る。

—あんなに真面目に、人に優しく生きてても殺されるのか。あれだけ真つ当に生きた男でも、わずか子供一人、妻一人さえ守り切れないのか。—
—そんな悔いの残る想いの最後に、ある一つの言葉が頭から離れない。

—つまり、人間とは何者なのか。どういう人生なら可能なのか？—

三十年代半ばまでを人生の前半とすれば、私の半生は押し寄せる苦悩と混乱の最中にあつたに違いない。がそうした中でも、現役の研究者として生きた後半の人生に繋がる経験も幾つかある。

大学四年の卒業前後、約半年にわたり、私は札幌市内にある国立病院の精神科に通った。そこでは日々、重いドアと鉄の柵で囲われた閉鎖病棟で長い時間を過ごした。その結果まず、典型的な精神分裂病にしても、そこにはある程度の人間らしい感情が備わり、対話可能な精神世界があること知らされた。

その後、大学院生の二年目から大学病院の精神科教室と、札幌の隣にある江別市立病院の精神科で心理テスターの仕事と心理相談室を任されるアルバイトを始めた。

勿論、今から半世紀近く前のことだから、心理テスターとか心理カウンセリングなどという分野はまだまだ未開の地に過ぎない。だから、私はそれらを外国語のテキスト類で自前の勉強をし、当初はまったく拙いまま、アルバイトに通う日々を送っていた。

雇われた先の病院で、自分がどれほど役立ったのか。それは今以って分からない。しかし私の方は、一生の宝となる数々の知識と経験をそこから得られた、と思っている。

交通事故で激しく頭を打つと、脳の破壊によるダメージがどれほど致命的な結果に結び付くか。脳のどの部分が破壊されると、人間の記憶はどれだけ、どんな風に崩れるのか。

あるいは、盗癖のある人とか、放火を繰り返す人々は何故そうするのか、等について本人自身から話を聞いたのも貴重な経験だった。

私の分野からいえば、それらはすべて異常心理学とか臨床心理学と呼ばれる。そうした中で、私の関心が一生薄れない問題が二つある。

一つは正常と異常の問題。もう一つは人間の使う常識と非常識、健康と不健康という言葉間の境界線の問題である。

どこの精神科でも、患者は精神異常という診断から始まる。そして精神科の治療とは精神の異常を正常に戻すこと。しかし、精神科の患者を前にして観察していると、その人物のどこが異常なのか分からないことも少なくない。

話を換えれば、今世界を騒がす「アルカイダ王国」の話が面白い。キリスト教徒の多い欧米各国ではみんな、アルカイダは悪魔の集団だから、アルカイダ王国の創設運動すべてを否定し、攻撃するのが当然だ、という。アメリカもヨーロッパも、もしかしたらロシアなんかも、その点は変わらないかも

しない。

アルカイダに所属する人間はすべて凶暴で、無条件で殺せ、という考え方が正常とみなされ、正しくもあり、神の正義にかなう話だ、と彼等は安易に思っているのかもしれない。

「だって、彼等は常に野蛮で、破壊的だろ。」

とは、あるテレビのインタビューでキリスト教徒だと名乗る人物が口にした言葉だ。

一方、精神科の患者の場合、自分が病気だと認めるケースは少ない。でも、精神科医の立場では、それを病識がない。だからその患者は精神病なのだということになる。

精神的異常と正常。そうした判断に基づく処置や結果は、患者の人生に大きな影響を与える。

私はそこで学んだ。世の中で習慣的、かつ日常的に使っている言葉にもっと注意しなければならぬ。正しいか、間違っているか。常識なのか、非常識なのか。そのどれにしても、明確な基準や根拠がなければ決められない。それを判断基準と言い換えれば、誰がどこでその判定基準が決められるのか。それを明確に知った上で、多くの人が判断を下すべきものだと。

心の中で自然に湧き上がるそうした疑問、難問を抱えてみると、自分が今までどれだけ出鱈目な言葉使いをしてきたのか、後になって震えだしたことを思い出す。

—まず、誰もが認める定義が必要だ。それがあればよし、もしなければ、常に世の中で使われている価値判断にしても、慎重の上にも慎重を重ねて口に出さねばならない。—

精神医学や臨床心理学の現場の実体験を通じて、私はそのことを悟った。年齢にして三十歳。現実の世界を自分自身のひたむきな努力と豊富な知識で捉えることの必要性を我が身に染み込ませる、それが最初の悟りの時期であり、機会だった。

(十三) 殺人犯の精神鑑定

二七歳のある日、北大病院の精神科から電話がきた。殺人を犯した人物の精神鑑定の一環として、当人の心理テストをお願いしたいということだ。

精神鑑定における心理テストなど、私にはかつて経験がない。精神科の患者の性格判断や自衛隊員の仮病発見のためなら、同じ心理テストにしても自信がある。しかし、これは一人の人間の犯罪性に関わる裁判に関係した話のようだから、責任も重いし、不安も起こる。

しかし、同じ大学の精神科には脳神経学の勉強や心理テストの実地訓練の

ために通いつづけているところだから、簡単にノーという返事も出来ない。即答を避け、少し時間をもらう。

人が人を裁く裁判、私はその制度そのものに中学時代から疑問がある。それが正当かどうか、あるいは社会的に不可欠な制度、というだけのものか。考えつづけながらまだ、自分なりの答えを持たない。

でも、殺人者には心理学者の端くれとして興味がある。それは相手に失礼な話かもしれないが、それでも湧き上がる興味や関心を消すことが出来ないのだ。

結局、私はその日の内にイエスと電話で答えた。そして数日後、大学病院の精神科で殺人犯といわれる人物と対面した。

場所は診察室でなく、別棟にある精神科の医局の近くにあった一室。室内にいる人間は相手と私だけだった。

通常のルールに従い、テストの開始前に私は気軽な、余り意味のない話に相手を誘った。

相手は自分の妻を殺した男性。医局から手渡されたカルテに七十数歳、という記載があった。

短い話し合いを始めて間もなく、私は相手の姿に驚きを覚えた。態度にまったく崩れたところがなく、話す言葉も端正そのもの。話の内容ですら、乱れた様子がまったくなくない。

—これは何かおかしい？—

表面上はともかく、心理テストの前に内心、乱れているのは私の方だ。ふと、誘惑に駆られ、禁句の言葉が口先に登る。

「失礼ですが、この殺人について貴方自身、どう思われますか？」

すると相手は、一瞬の躊躇なくこう答えた。

「確かに、私は妻を殺しました。妻が私を裏切り、どうしても許せなかったのです。しかし、今になっても、私に後悔はありません。殺すしか他に、道がなかったのです。」

「そうですか、……………」

しばしの穏やかな沈黙。重苦しさの一欠けらもない不思議な世界。

—では一体、誰が何を理由にこの人を裁けるのか。重刑か無罪か。それとも、この人の隠れた部分に狂気が潜んでいるのか？—

それでもとにかく、それなりの心理テストと知能テストを行う。

結果は明瞭、知能優秀にして性格的異常なし。でもそれが、狂った上での殺意でなく、正常な意識での殺意を裏付けてしまう材料の一つになってしまうのだろうか。

人間世界における裁判制度。あるいは個人的な人間と人間の関係。どれもこれも分からない。

すべてが終わり、看護師に先導される形で七十数歳の人物が部屋を出て行く。その背中に私は思わず声を掛けた。

「お元気で、……。」

すると一瞬こちらを向いた相手もから、とても落ち着いた言葉が返ってきた。

「どうも有難うございます。」

(十四) 精神病院の異端者

心理テスターとして幾つかの精神病院や精神科病棟に出入りした当初、あることに目を奪われ、強い関心を抱いた。

初め経験したとき以来、私にとつても、重々しい鍵の向こうにある閉鎖病棟は特別な世界だった。直接向き合う、あるいは廊下ですれ違う人すべてから表情が消えている。そのせいか、目の前の人が嬉しいのか、悲しいのか。あるいは喜んでいいるのか、怒っているのか。何一つ、患者の心情や心理が分からない。

今にして思えば、精神科では患者という患者すべてに精神安定剤かそれに類似する薬が休みなく投与され、人為的にそうなっていたのだろう。ところでもう一つ、そうした長期入院患者の知能テストで、印象に残る話がある。

専門家または専門家の卵の一人として行う心理テストは大きく分けて二つある。一つは勿論、性格テスト。もう一つが知能テストだ。

心理学の学生になった二十歳の頃、私達自身も仲間同士で心理テストや知能テストに参加した。その折り、毎年定員七名の学生仲間の結果はIQで百二十から百四十。成人すべての平均が百に決められたテストの結果として考えたとき、当然といえれば当然の結果だった。ところがである。

新しい患者ばかりでなく、古くから精神科に入院する患者についても、病状に変化が起きれば、担当医から心理テストや知能テストの要請がある。そこでテストを始めてみると、予想外の結果に動揺した覚えがある。

IQを計る標準テストは元々、無作為に選ばれた数万人の成人で平均値が百になるよう設定されたものだが、閉鎖病棟に長期滞在する患者にはそれがどうも通用しない。

一人目、二人目、さらに十人目までは驚かない。ところが、同じ知能テストで五十人目から百人目を超えてもほぼ変わらない結果を前にすると、テストの心情も唯事でない。動揺も不安も同時に重なる。つまり、平均標準値百あるいはそれ以上という事例が見当たらないのだ。

脳障害のある患者や先天的な脳疾患患者がIQの二十や三十でも驚くに値しない。ある程度の年齢になって初めて精神病になった筈の患者がすべて、

IQの七十から八五の範囲に留まられると、相手の患者さん達の替わりに、テストそのものに不自信が募る。

—このテストは間違っているに違いない。—
まだ若すぎる程若かった二十代、私は何度もそんな思いに悩まされつづけた。

が、精神科の入院患者について、もう一つ印象的だったことがある。

精神科の患者さんはいつ、どこでも、他人に対してよそよそしい。擦れ違う相手に笑顔を向けることも、簡単な挨拶の言葉も聞かれない。ところがどこの何病院にいても、折り目正しく挨拶する患者は必ずいる。その言葉も丁寧だし頭も悪くはなさそうだ。身に着ける衣服にしても、キチンとしている。ふと、その相手が精神科の患者なのか、あるいはその職員なのか、区別が付かない。

そこである時、看護士の一人に聞いてみた。

「今ここから出ていった患者さんの病名はなんですか？」

「ああ、あの方。アルコール中毒で入院されている方ですよ。そうか、先生はまだ若いからびびくりしたんでしょう。でも、アルコール患者の方は普段、いつも礼儀正しいのよ。少なくとも、私達のような病院のスタッフにはね。」

「そうなんですか。精神科の患者さんとはとても見えませんかね。」
「でもね、あの患者さんが一月前、ここに運び込まれてきたときは怖かったですよ。手あたり次第に物は投げるし、大きな叫び声は止まらないし、みんな大変だったんですよ。」

「・・・？」

生まれてこのかた、私の周囲にアルコールの中毒患者はいなかった。父もその周囲の人々の中にも、中毒症状に陥る人物は見当たらなかった。それはまた、大学の構内でも、たまに出掛ける札幌市内の街中でも同じだった。

私は元来、極端に酒が弱かった。小学生の頃は甘酒に酔い、高校生の時に友達の家で出されたビールの苦さに驚き、悶えた。そこで大学の入学と同時に、酒は一切飲めません。身体がまったく受けつけないんです、と宣言し、その宣言を自分で厳格に守り通した。

当然そうなると、大学近くの飲み屋も、世間に知られた歓楽街のススキノにも出掛けることもなくなる。だから結果的に、私はその時までアルコール中毒患者と無縁な日々がつづいたのだろう。それにしても、飲めばハイドがジキルに急変する、という話には底知れぬ怖さを禁じ得ない。

私は二十歳直前から古希の現在まで、タバコと無縁に暮らした時期は殆どない。その点では、私は立派なニコチン中毒。自他共に許す中毒患者の一人ということになる。しかし、タバコは人間の健康にいい、と笑いながら胸を張る幼友達の話を別にしても、私はやはり、死ぬまで手元からタバコを離す

つもりがない。強いていうなら、
―、好きなタバコをつづけたいから、私は敢えて独居老人の日々を送っているのだ。―

と腹の底から思っているのも事実である。

だが最近、不法ドラックが元で悲惨な社会的事故と事件が後を絶たない。それに酒によつて起こす交通事故も数知れず、麻薬の生産や裏取引では世界中で殺戮が絶えず、国家と戦うマフィアのニュースも、テレビでは何度も見ているし、それに直接関連する翻訳本も読んでいる。

中毒と痛ましい事件、中毒と驚くべき犯罪。そんなことを考えるにつけ、いつも頭に浮かぶのがある精神科病棟で見た折り目正しいアルコール中毒の患者さん。犬から始めた動物研究を通じて、一度も遭遇することのなかった人間固有の中毒の様相。私はふと、自分が人間であること意味とか価値に疑問の念を浮かべる。

(十五) 仮病と放火魔

二十代、精神病棟で経験したことは個人的にすべて貴重で、その数も少ない。その中に、精神科医からの依頼で心理テストを引き受けた二つの事例も忘れられない。

二人は共に自衛官。二十代後半から三十代前半の男性。テスト室で向き合った限り、どこかおかしい、と思える雰囲気をもったく見せない。あるいは、困った人間とか変な人間、などと言われる由縁のない人物に見える。

仮病を疑われ、自衛隊勤務違反に問われた人物。二、三の質問紙法による検査結果に問題はない。受け答えと共に、きわめて正常、驚くほど平均的な人物。だが、最後に行うロールシャッハテストの一枚目を手渡したとき、彼は突然態度を変えた。

「済みません。私は仮病を使いました。もう検査は必要ありません。すぐ、勤務に戻してください。」

「・・・・・・？」

意外だった。そんな言葉を急に聞かされるとは思わなかった。

「どうしたんですか？」

「いえ、インクの染みを出鱈目に散らしたようなこのテスト版を見たとき、もう駄目だと直観的に分かりました。」

「貴方のような方は初めてです。テスト版の内容が出鱈目なら、どう答えたつていいじゃないですか。」

「それは違います。言葉で聞かれるなら、どう答えればいいか見当も付きません。しかし、正解のなさそうなこうしたテストをやられると、何故か恐怖感

を覚えます。とくに、仮病で勤務をサボろうとしてきた私の場合、それこそ困るのです。」

「そうですか、分かりました。」

日本の自衛隊というところの内部事情は、私のような部外者にとつて分からない。分かるうとしたこともない、というのが本当かもしれない。それにしても、心理学とは無縁の人物から、一瞬でロールシヤツハテストの難しさ、怖さを悟られるとは、驚き以外の何物でもない。

数々の心理テスト、その多くはある程度見破れる。ここでどう答えたら正常とみなされるのか。これは余り意味のない質問なのだろう。等々、少し狡く考えれば、自分の精神的歪みなど、テストの中でなら隠しきれぬ。少なくとも、臨床心理学を少々齧った経験のある人間なら誰でも、同じことを考えているだろう。

それにしても、彼の頭脳はたいしたものだ。余り社会的な地位のない自分の身を守る術と、その限界を承知している。

次は放火を繰り返してきた放火魔の話だ。その人物はテスト場面で私と向き合った時、暗い感じが否めなかった。どこかに怯えのようなものが隠されているようにも思えた。

余り会話をせずに、まずテストを始めた。心理テストの種類は三つ、それに知能テストを加えた。

テストに入ると彼は素直だった。戸惑うこともなく、短時間ですべてが終わった。それから、私は相手に話し掛けた。

「私の手元に来た書類によると、貴方は放火の現場を押さえられたそうですね。」

「はい、そうです。」

「ところで、気楽にお答え戴きたいのですが、貴方はこれまで何度も放火の経験があるのですか？」

「はい、そうです。」

「貴方は自分の放火癖を止めたり、止めることが今後可能だと思いますか？」

「いえ、止めたいとは思いますが、無理だと思えます。」

そこまで聞いて、私は一方的な態度を捨てた。その代わり、気楽な雰囲気での雑談に移った。

「放火は面白いですか？」

「はい、気分が晴れます。」

「えっ、……。」

私の驚く姿を見て、彼の顔に微笑が浮かんできた。それから徐に、放火に至る独自の心理状況について彼は語ってくれた。

自分は生まれた時から家族にからかわれ、虐げられて育った。そのせいかどうか、学校では小学校から高校まで、常に誰かに苛められ、いびられてきた。それは今の自衛隊生活でも変わらない。

常にビクビクしているのかもしれない。でも、子供時代なら秘かに泣いて我慢したことが、大人になると我慢できなくなった。そしてある時、隊内で起こった火事騒ぎの現場で、普段から自分をいじめつづけてきた仲間や上官達が気の毒なほど狼狽えるのを目撃した。そして、

「仕返しは、これだ！」と思った。

以来今日まで、隊内で何度放火を繰り返したか分からない。見付からなければ、それでよかった。しかし今回、幸か不幸か、その現場を押さえられ、ここで精神鑑定を受けさせられることになったのです。

私はこの話を聞き、本人を目の前にして考え込んだ。

―放火以外に、本人の虐げられた心癒す術など、他にあっただろうか。私が彼と同じ境遇を抱えて生きるとしたら、他の生き方は可能だったろうか。心理学の専門家や教会の経験ある牧師や教師にしたところで、この人物に救いの手段や方法を授けられるだろうか。

その時の心理テストで彼がどのような性格や知能だったか、私は覚えていない。ただ、面談を終えて分かれるとき、自分の口にした言葉だけは覚えて
いる。

「じゃ、ともかくお元気で、……………」